命の器

宮本 輝

講談社

命の器

一九八三年十月二十日　第一刷発行
一九八四年一月二十日　第四刷発行

著　者　宮本　輝
発行者　加藤勝久
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)　振替東京八―三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
定　価　一〇〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

© Teru Miyamoto 1983, Printed in Japan

ISBN4-06-200718-5 (0)　(文1)

命(いのち)の器(うつわ)　目次

I

吹雪 11
父がくれたもの 16
わが心の雪 20
大地 23
東京は嫌い 26
雨の日に思う 33
かぐや姫の「神田川」 37
正月競馬 39
改札口 43

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十冊の文庫本　49
精神の金庫　53
蟻のストマイ　55
命の器　57
馬を持つ夢　60

Ⅱ

街の中の寺　65
私の愛した犬たち　79
「内なる女」と性　85

南紀の海岸線　99
貧しい口元　102
潮音風声　104

Ⅲ

アラマサヒト氏からの電報　139
成長しつづけた作家　143
坂上楠生さんの新しさ　150
「川」三部作を終えて　152
芥川賞と私　156

命の力 160
「泥の河」の風景 166
「泥の河」の映画化 169
小栗康平氏のこと 173
「道頓堀川」の映画化 177
私の「優駿」と東京優駿 180
「風の王」に魅せられて 186
錦繡の日々 191
あとがき 197
初出一覧 198

命(いのち)の器(うつわ)

装幀　山岸義明

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

吹雪

列車は停まったままだった。もう一時間近く、北陸の雪原の中に閉じ込められて、いっこうに動きだそうとしなかった。あんなにもすさまじい雪は、あとにもさきにも、二十五年前の、大阪から富山に向かう立山一号の満員の車内の窓から見たもの以外、一度もない。

「これが、吹雪というやつや」

と父が教えてくれた。座席には、十歳の私と、父と母、それに見知らぬ鳥打ち帽の男が一緒だった。男は大きな旅行鞄を通路側に置き、その上にウィスキーの壜やら地図やら手帳やらを乗せて、ときおりその脂ぎった赤い顔を私に向けた。愛想笑いひとつ浮かべず、私を見つめる男が気味悪く、私はきっとこの人は悪い人なのだと思った。大きな旅行鞄が、通路を歩く人の邪魔になっていることなどまったく意に介さず、ウィスキーを呑み、カマボコを食べている。外は一メートル先が見えないほどの吹雪である。

それまでひとことも発しなかった男が、突然口を開いた。
「このぶんやと、着くのはあしたの朝になるかもしれまへんなァ」
あしたになろうがあさってになろうが、どうでもいい。そんな言い方であった。
「月に二、三回、富山へ行きますが、こんな雪は初めてですなァ」
父は黙っていた。男の言葉に何の返答もせず、煙草を喫っていた。それで私は、父もこの男を悪い人だと思っているのに違いないと考えた。父は口髭をはやし、太い眉と切れ長の目をしていた。父が本気で怒って睨みつけると、たいていのチンピラは怖気づいた。私たちはすべてを売り払い、知人を頼って富山に新天地を求めるべく、立山一号に乗ったのである。
「どうです、一杯。悪い酒やおまへんで」
男は父にウィスキーのキャップを差し出した。父はことわったが男はしつこくすすめた。
「わしは、酒はやらんのじゃ。酒の匂いを嗅ぐだけで胸が悪うなるけん、どこか他の席に移ってくれ」
父は煙草のけむりを男の顔に吹きかけてそう言った。母が怯えた顔で父を見ていた。父は寝起きに一杯、昼にも一杯、夜には腰をすえて一升酒という酒豪であった。男は少したじろいだようだった。満員で、通路には席を取れなかった人たちが新聞紙を敷いて坐り込んでいる状態だったから、他の席に移れと言ったのは、父がはっきり男にケンカを売ったのと同じだった。

だがそういうタンカを吐くときの父の顔には、一種泰然たる風格と気迫がみなぎっていた。
「そないムキにならんでも……」
男は作り笑いを浮かべ、
「大将、伊予のお方でっか」
と訊いた。愛媛県の南宇和郡出身の父は、死ぬまでいなか言葉を使った。男は居心地が悪そうに体を通路側にねじり、父に背を向ける格好で地図をひろげた。
「ほんまに、あしたまでに着けへんのん？」
私は心配になって父に訊いた。
「春になったら着くけん、安心しちょれ」
父は笑い、それから腕を組んで目を閉じた。こんどは男は私に話しかけてきた。ひろげた地図を見せ、
「ぼくは、どこへ行きはるんや」
と訊いた。
「知らん」
私は目を閉じている父を窺いながらそう答えた。
「おっちゃんにもなァ、あんたぐらいの子供がおるんや。女の子やけどなァ」

だが不愛想な親子にこれ以上かかわっているのは面倒だと思ったのであろう。男は人々の間を縫って便所へ行き、帰って来ると、そのまま眠ってしまった。私はスチームの熱で火照る頬を窓ガラスに押し当て、すさまじい吹雪を見つめた。いつまでも見つめた。列車はやがて動きだした。そしてまた停まり、しばらくして再び動いた。そのうち、私も眠った。目を醒ますと、窓外は漆黒の闇で、列車はゆっくりとした速度で進んでいる。父の膝の上には男の持ち物である地図が置かれ、殆ど空になったウィスキーの壜が、父の掌に握られていた。男と父は、小さなキャップにウィスキーをついで、差しつ差されつ仲良く話に興じている。父は男のカマボコを勝手につまんで、私の口の中に入れた。

「これが神通川です。ここらの土地はまだ安いし、工場に出来るような家がなんぼでもおまっせ」

男は、指先で地図の上をなぞり、ここが豊川町、ここが総曲輪と説明した。立山一号は予定より四時間遅れ、夜の十一時過ぎに富山駅に着いた。私たちと男はホームで別れた。女が男をホームまで迎えに来ていた。男は旅行鞄を置くと、女の手から、まだ二つか三つぐらいの男の子を抱き取って頬ずりした。

「女房の子供より、あの女の子供の方が愛しいんじゃろうのお」

父は私の手を引いて独特の笑みを浮かべつつ呟き、暗い改札口へ歩いて行った。二十五年前

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com